

松田 一番早かったのが小布施町で、行政と市民が一体になって小布施町らしい街をつくりましょうと行政から住民に呼びかけ、街の景観づくりを始めました。住民と一緒に海外研修を重ね、色彩や建物の高さを織り込んだわかりやすいマニュアルを住民と一緒に作ってつくりあげています。その結果、すばらしい景観ができ、観光客が全国から年間145万人も訪れるようになり、観光の町として小布施町の収益がぐさましく上がっています。また花産業で地産地消をはかり、利益が住民に還元されることで、住民はいつそう自分の

高梨 長野県の小布施町では、産業おこしの観点からもオープンガーデンに取り組んでいるようですね。



2007年「全国花のまちづくりコンクール」優秀賞受賞のまちなみボンエルフにバラが咲き乱れて美しい(兵庫県三田市) 【写真提供(2点): 三田 花と緑のネットワーク】



ゆるやかな斜面の庭が通行人に語りかける(宮崎県宮崎市)

『マイガーデン』で取材させていただいてまいりました。オープンガーデンの素敵な点は、誰かが「やりなさい」と強制するわけではないのに、自然に輪が広がっていくところです。植物によって元気になる、庭を介して人と人との強い結びつきができる、そんなことを、オープンガーデンに係る一人ひとりのみなさまが、ごく自然に楽しんでおられます。そんないきいきとした楽しさを、公園という公共のスペースにもうまく繋げられれば良いな、と思います。ところが現実には、自分の庭を大切にすると同じ思いを市民が空地や公園に敷衍しようとしたときに、様々な規制が「待った」をかける。市民は参加できない、ただ見るだけといった公園の規制をまず緩めなければと思います。みんなが自分の庭と同じように思える市民参加型の公園こそが、本当の地域の公園だと思います。

高梨 市民は、身近な環境が質の高いものになって欲しい、環境への思いが叶えられる公園になって欲しいわけですね。

松田 自分の庭と公園が切り離されず、広い意味で、一体になった使い方ができると良いですね。

**すべては地域からの取り組み
——個人の庭から公の空間へ**

高梨 環境問題についての時代認識と地域を繋ぐのがパブリックな公園という二指摘ですが、重視すべきポイントは何でしょうか。

涌井 全国を歩いて日本の公園文化の系譜を考えると、西欧諸国と違って日本は都市を周囲から閉じこめず、森と農地と都市的要素を混在させたのが特色です。例えば江戸は庭園都市と賞賛されていました。いま世界が目指そうとしている「生態環境都市」を世界に先駆けて実現させていたのです。江戸にはイギリス以上にコモンの思想があり、公園をつくらなくても屋敷の緑、寺社の緑、個人の庭の緑が十分だったので。そのコモンが崩壊し、残念ながら都市のスプロール化を許してしまいました。現在策定中の国土形成計画では、21世紀は社会資本と自然資本の共存の時代であり、また新たな公の創出が必要と書かれています。新たな公とは、市民が共有できるものを市民で守り育てていくマネジメントとオペレーションです。ですが、「自分の庭の延長線上で街

庭や公共を綺麗にするというように、理想的な好循環が実現されています。

高梨 先ほど涌井先生がおっしゃった自立の精神、共有できる価値観をもって、小布施町民自らの責任での取り組みが花開いた、また花の持つ力で人や街が輝くという話は感動的です。どうも環境問題を語ると悲壮感が漂う、しかし価値観を共有し、人が輝くように実践し、それがまちづくりに発展して地球環境問題に対処する、涌井先生はどう思われますか。

涌井 そうですね。われわれが計画論をやるとつい大上段に振りかざしますが、市民が自らの楽しみをきっかけにまちづくりに目覚め、意識を共有していくという等身大の運動こそ正道でしょうね。昔日本には『おらが在所が一番』という言葉がありました。自分の在所が良いのではなく、あまり恵まれていないが一番にしようという決意なのです。工業化と人口増の時代は、人は地方から都市へ、都市から都市へ



多くの来訪者を迎えるオープンガーデン(長野県小布施町)

を美しく」の考えは良いのですが、自分の趣味の延長線上では困る笑。「私はバラが好きだからバラじゃなきゃ駄目よ」では公益という議論から外れてしまふ。自立的な運営の秩序と共有できる価値観、公益性の認識、それによってはじめてコモンが可能になります。

高梨 都市環境を保全し、次世代へバトンタッチするには価値観の共有が重要で、身近な場からのオープンガーデン運動はまさに第一歩になりますね。

松田 いまは、自分が楽しくから一歩進んで、「まちなみや街全体を良くしよう」というところへ私たちの気持ち進化しています。阪神・淡路大震災も契機のひとつで、故郷を離れて移り住んだ新しい街を、「子供たちの故郷に」と考えはじめた人たちがいます。誰かが一生懸命にガーデンづくりをすると、素敵な庭は、そのお隣り、またお隣りへと広がり、街全体が景観賞をいただけるほど美しくなります。するとその街で育った子供たちには、ちゃんと美しい街を愛するDNAが植えつけられるのです。良い街をつくらなくてはならない」と大上段に振りかざさなくても、みんなが庭や美しい街を大切に思うことで、暮らしが豊か楽しくな



お隣からお隣へ広がるガーデンづくり北摂三田ウッドタウン(兵庫県三田市)

と動いていきます。ところが人口減で脱工業化の時代では、ここに住み続けるという意識が強くなります。おらが在所が一番という意識がないと子育てもできない、街に対するこだわりがままでも違うのです。身近なところを楽しむ、等身大の幸せが大事と気がついていたいままはチャンスですね。オープンガーデンの運動には、その街でいつまでも暮らすという決意があるように思えますね。

**万が一の公園と
九千九百九十九の公園**

高梨 日本は地震災害の多い国ですから、安全で安心して住めることも重要です。UR都市機構の公園づくりのひとつは、万が一の公園づくり、つまり防災公園の整備を重視しています。また一万から一を引くと九千九百九十九の公園、これは普段の公園で、全国で都市再生を図る公園づくりのお手伝いをしていきますが、これからの公園にこういう視点が肝要、こんな良い事例があるなどお聞かせいただけませんか。

松田 いま主婦は環境に敏感ですから、雨水利用や生ゴミコンポスト(堆肥化容器)やソーラーなど、太陽、水、風なども活用して地球を大切に守っているという公園が共感を呼ぶと思います。いつも身近にある公園が、万が一の時に役に立つ雨水タンクやソーラー発電を備えていてくれれば、安心して嬉しそうですね。

**全国で展開している
特徴のある公園づくり**

UR都市機構は、都市の防災性の向上、都市景観や自然環境の創出再生、歴史文化の活用などを通して、地域に貢献し都市再生に寄与する公園づくりを全国で進めています。その一例をご紹介します。



樹海公園(秋田県大館市)

面積約7.5haの地区公園。体育館の建設にあたっては、地域の特色である「木の文化」を生かし、大屋根に集成材、天井などに地元材(秋田杉)を使用。2007年の秋田国体のバレーボール会場として利用。



勿来の関公園(福島県いわき市)

平安時代に和歌に多く詠まれた「勿来の関」の歴史と自然環境を生かして整備された、面積約30haの公園。寝殿造の邸宅を模した体験学習施設「吹風殿(すいふうでん)」、日本庭園を整備。



関宿総合公園(千葉県野田市)

面積約10haの総合公園。公園敷地内にあった産業廃棄物処分場跡地を園地や修景池として整備し、自然を復元し再生。



中原ふれあい防災公園(千葉県柏市)

柏市南部の戸建住宅地に囲まれた牧場跡地を防災公園に転換。面積約4.8haの地区公園で、災害時にはヘリポートとして使用可能な芝生広場や災害応急対策施設(非常用トイレなど)を整備。



南長野運動公園(長野県長野市)

面積約29.7haの運動公園。平成10年に開催された第18回長野冬季五輪の閉会式会場として使用された多目的球技場、体育館・プール棟、駐車場及び周辺外構などを整備。



大池総合公園(静岡県掛川市)

面積約14.1haの総合公園。屋内プールを併設した総合体育館(さんりーな)や周辺の恵まれた自然環境を生かした自然観察園、園路、多目的広場などを整備。



小牧市スポーツ公園(愛知県小牧市)

面積約11.4haの運動公園。体育館(パークアリーナ小牧)、サッカー場といった運動施設の整備と合瀬川の自然環境を再生する親水護岸の整備(合瀬川プロムナード)を一体で実施。